

全日本曲技飛行競技会

今年の誌上ジャッジスクール 2012 (1)

米国 IAC 曲技飛行公認審判員 高木 雄一



昨年、5 回にわたって連載した誌上ジャッジスクールでは、曲技飛行競技と競技飛行の判定方法などをご紹介させて頂きました。曲技飛行競技が日本の航空文化の一つとして発展していくことを願い、今年も引続き誌面にて情報をお伝えしたいと思います。現在のところ、新たな IAC ルールの改正部分、2012 年度のノウンプログラムの紹介、スナップロールやスクエアループなどインターミディエイトカテゴリーに見られるフィギュアの解説などを予定しております。

●IAC ルールブックの翻訳作業

2010 年 10 月に行われた第 1 回全日本曲技飛行競技会の後、実行委員会は第 2 回競技会の開催準備を開始しました。予想以上の成功を収めたこの競技会をさらに充実させるため、私はジャッジとして参加した内海昌浩氏と協力し、米国 IAC のルールブックの日本語訳をさらに進めました。全 8 章からなる IAC ルールブックを現在の日本の状況に合わせる為に多少の変更をし、苦勞の末に完成させることができました。

将来的には、世界選手権で活躍できる競技者を育成することを目標に、FAI ルールへと移行することも検討されていますが、比較的簡素で受け入れやすい IAC ルールを国内の競技会で用いる国も多くあり、今後もしばらくは IAC ルールが使われる見込みです。

●ジャッジスクールの開催

翻訳した IAC ルールブックを手に、私は昨年 9 月から 10 月にかけて、熊本、東京、福島の 3 箇所でのジャッジスクールを行い、計 25 名の方にご参加を頂きました。残念ながら第 2 回競技会では参加機種の関係でインターミディエイト

競技は開催されませんでした。ジャッジとして次年度の準備が必要と考え、これら上級フィギュアの解説も行いました。

今年度の誌上ジャッジスクールでは、インターミディエイトの代表的なフィギュアを解説し、また 2012 年 10 月上旬を予定している次回ジャッジスクールでは、アドバンスドに見られるフィギュアの解説も行いたいと考えています。



第 2 回全日本曲技飛行競技会のジャッジライン

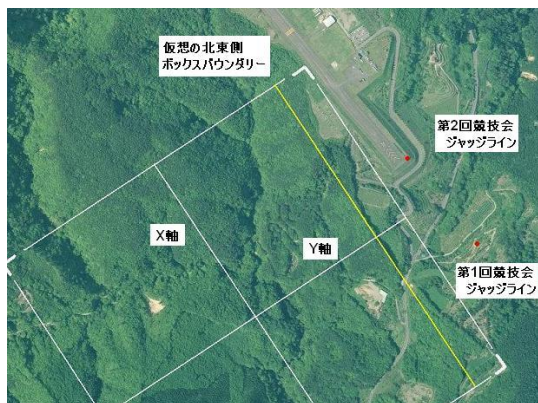
●新たなジャッジラインへの変更

競技飛行の判定には、ジャッジラインを適切な場所に設定することが重要です。規定では、ボックスバウンダリーから 150-250m の Y 軸の延長線上としていますが、第 1 回競技会のジャッジラインは約 110m と近く、また標高が低いところにありました。これでは競技飛行を頭上に見上げるようになり、また周囲の地形の関係からボックス内に死角なってしまうところもあって、フィギュアの判定に無理がありました。

これを解決するために、第 2 回競技会ではジャッジラインを RWY32 のアプローチエンド横に設置しました。バウンダリーからの距離は約

90m と近くなりましたが、標高が高くなることでフィギュアの精確な判定が可能になり、死角も解消できました。また人員の配置や運営本部との連絡に便利で、今後もこの場所をジャッジラインとして用いることになると思われます。

引き続き残る問題点は、バウンダリーまでの距離が近いことで、競技者の方々にボックス内側 100m ほどのところに仮想のバウンダリーを持って飛行するというをお願いしました。一割ほど競技ボックスが狭くなるものの、大きな問題とはならなかったように見えました。



競技ボックスのバウンダリーとジャッジライン

●第2回競技会を振り返って

第1回競技会は、特に運営面で素晴らしい競技会でしたが、2011年度の第2回競技会では、ルールに沿った競技飛行の遂行と、フィギュアの精確さ、そしてジャッジングの精度がより確かなものになったことが上げられます。

前回はオフィシャルウィンドの判断を誤って飛行してしまうなどの失敗が見られましたが、今回はそれも見られず、全体を通してルールを熟知しての飛行が行われました。また、参加者全員のフィギュアの精度が向上しており、特に上位の競技者はIACの競技会でも高得点が得られる出来となっていました。限られた環境と練習時間、その中での確実な技量向上は本当に素晴らしい、今後の発展が期待できます。

ジャッジとして参加する方々にはルールの再確認のために、前回と同様にジャッジスクールを修了することをお願いしました。まず、前回ジャッジを経験した方に初日の予選の飛行のジャッジングをお願いして、初参加となるアシス

タントジャッジの方々にはジャッジが判定している様子を学んで頂くというものです。そして、ジャッジングの準備ができた方はジャッジを経験して頂き、今回新たに数名のジャッジが誕生しました。中には将来競技飛行に参加する予定の方もいましたが、ジャッジの経験は競技参加にも大きな武器となることでしょう。

私は第1回競技会ではチーフジャッジとしてジャッジ全体を統括する側ら、グレーディングジャッジとして判定も行いました。前回は多少仕事量が多すぎたようで、チーフジャッジとしての作業を消化できないところがありました。ここを反省して、第2回競技会では私はチーフジャッジの作業に専念し、時折見られたイレギュラーな事にも公正に対処することができました。加えて、無線を用いての競技ボックスへの誘導も、ジャッジラインでの状況も加味しながら順調に行え、競技飛行を効率よく進めることができたこともよかったです。

反省点は、競技者の交代や機体準備の様子を把握していなかったために、競技の進行を妨げてしまったことです。今後はこのようなことがないように心がけます。

●第3回競技会に向けて

近く、Pitts や Extra などが日本に新たに導入される見通しで、また競技参加者の著しい技量の向上もあり、第3回競技会ではインターミディエイトの開催はほぼ確実となりました。

プライマリーやスポーツマンと異なり、インターミディエイトではノン、フリー、アンノウンと、3種類の飛行が行われます。この内、ノンとアンノウンの飛行はカテゴリーに参加する競技者全員が同じ飛行をするため、ジャッジとしての対処は難しいものではありませんが、フリーは各競技者が異なる飛行を行います。ジャッジ全員の判定基準を同じくするため、飛行前に再確認するなどして公平な判定ができるよう努力したいと思います。新たなジャッジ要員を確保することも課題の一つです。

競技会としての基盤を確実なものとするために、今後も着実に前進して行くよう、心がけたいと思います。